

エックハルト『ヨハネ福音書註解』 に対する若干の註釈の試み

中山善樹

1

私は以下においてエックハルトの『ヨハネ福音書註解』(*Expositio sancti Evangelii secundum Iohannem*)⁽¹⁾の若干の主題について考察を試みたい。まずエックハルトのラテン語著作の全著作のうちにおけるこの著作の特有の位置について述べなければならない。この著作は独立したものとして書き下ろされたものではなく、『三部作』(*Opus tripartitum*)と呼ばれる未完の大作の一部に属するものとして執筆されたものであった。『三部作』は「序文」(*Prologus*)、⁽²⁾「提題集」(*Opus propositioinum*)、⁽³⁾「問題集」(*Opus quaestionum*)、⁽⁴⁾「註解集」(*Opus expositionum*)から成り立っていた。すなわち千以上の根本語の提題からなる「提題集」と少数の問題をトマスの『神学大全』の形式にならって論じる「問題集」、さらに他では取り上げられることの少ない聖句が解釈される「註解集」という三つの作品群からこの『三部作』は成り立っていた。さらに「註解集」は本来の「聖書註解集」(*Expositiones*)と「説教集」(*Opus sermonum*)に分かたれていた⁽⁵⁾。

そのうち現在までのところ「序文」と「註解集」の一部ないし全体が伝承されてきている。すなわち「序文」に属する「三部作全般的序文」(*Prologus generalis in opus tripartitum*)⁷、「提題集序文」(*Prologus in opus propositionum*)⁸、「註解集序文」(*Prologus in opus expositionum*)と「註解集」に属する『創世記註解』(*Expositio Libri Genesis*)⁹、「創世記比喩解」(*Liber Parabolarum Genesis*)¹⁰、「出エジプト記註解」(*Expositio Libri Exodi*)¹¹、「知恵の書註解」(*Expositio Libri Sapientiae*)¹²、『ヨハネ福音書註解』¹³、「雅歌註解」(断片) (*Expositio Cant. 1,6*)¹⁴である。また「説教集」の少なくとも一部には現存の『ラテン語説教集』がおそらく含まれていると推定される。しかしこの著作は本来の説教の草稿であった可能性が強く、いずれにしても未完成のものである。このなかで最も高い完成度に達しており、かつ最も浩瀚な作品は『ヨハネ福音書註解』である¹⁵。この作品はその思想と表現の豊かさにおいて、現存のドイツ語著作を含めた全著作のなかで主著といつて差し支えない。

次に執筆年代であるが、いまだ最終的に確定していないものの、最近の研究¹⁶によっていくらか進捗した。現存する『三部作』とりわけその中核部分をなす聖書註解は従来考えられていたよりも早く第一回パリ大学教授時代(1302-03)に続くドミニコ会サクソニア(ザクセン)管区長時代、だいたい一三〇五年に執筆が開始されたのではないかと推定されている。最初に『創世記註解』が成立し、ついで『知恵の書註解』、そのあと『出エジプト記註解』が続き、『創世記比喩解』と『ヨハネ福音書註解』はこれらより後に着手されたとされている。興味ぶかいことに「序文」はそれらより早くすでに第一回教授時代に成立していたようである。そしてそれらの作品が確定的な形をとったのは第二回パリ大学教授時代(1311-13)以降であったと推定されている。これで見ると、『ヨハネ福音書註解』はこれらのなかで最も後期に属する作品であることが判る。事実その本文のなかには、「聖トマス」(*sanctus Thomas*)という表現¹⁷がみられるが、トマスが列聖されたのは一三二三年のことであり、この年はエックハルトの晩年にあたり、か

つて自分が学んだケルンのドミニコ会神学大学の学頭についた年であった。一三二八年にはエックハルトはアヴィニオンで亡くなってから、もしこの推定が正しいとするなら、エックハルトは晩年にいたるまで『ヨハネ福音書註解』の完成に勤しんだことになる。この作品の完成度の高さから推測してもこのことは説得的であるように思われる。

2

ところでエックハルトの聖書註解は通常のそれのように連続的逐語的註解ではなく、少数の聖句を選んで、それを「哲学者の自然的論証」(rationes naturales philosophorum)^⑥によって解釈したものであった。その際には、その聖句の字義の意味はほとんど顧慮されることなく、字義の意味の背後に隠されている比喩的靈的意味を露わにすることが註解の課題であった。エックハルトは『ヨハネ福音書註解』においてもこの彼独自の註解の原則を厳密に適用している。以下ではそこにおいて特に詳述されている始原論と受肉論をとりあげることにした。

『ヨハネ福音書註解』においては、その本文の三分の一が第一章の解釈にあてられており、そのまた三分の二が第一章の冒頭部分、すなわち第一節から第十八節の解釈に占められている。ここでの最も重要な議論はヨハネの冒頭の聖句「始めに言葉があった」(In principio erat verbum) (1,1) における「始め」(principium) すなわち「始原」の解釈である。エックハルトによれば^⑦、「始原」とはまず第一に「理念」(ratio)である。産み出されるものは理念を通して産み出すものから発出するのであって、それは諸事物の原因であり、定義が告知するものであり、その理念を知性が把握するのである。例をあげると、職人の精神のなかにある箱はいまだ箱ではなく、職人の知性認識であってそ

の現勢的観念 (*conceptio actualis*) である⁽⁸⁾。エックハルトが好んであげる例をあげると「義人」(*justus*) は「義」(*justitia*) によって義人なのであって、義はけっして義人から抽象されたものではなく、義人に対して存在論的に先行するのである。また「始原」は単独の個別的な理念をさすのではなく、アウグスティヌスも言うように⁽⁹⁾、すべての活ける不可変的な諸理念によって満たされたいわば或る種の根源的な知であり、その知のうちではすべての理念が一なるものとして現存しているのである。

ここからまた、エックハルトによれば、始原は「知性」(*intellectus*) ないし「知性認識」(*intelligere*) として捉えられるのである。知性の固有性は知性認識の対象をその始原において把握するところにある。エックハルトによれば、すべての認識はその始原において成立しているのであって、認識がその始原のうちに還元されるまでは、認識そのものはたえず覆われたものであり、暗いものに留まるのである⁽¹⁰⁾。そのうちに諸理念が存在している始原は知性としてその結果をよりいっそう高貴な仕方であらかじめ有している本質的に働くものである。

しかしながらエックハルトは第三に始原を「存在」(*esse*) として捉える。すべての働きはその真なる存在をその原因のうちには有しているが、第一原因としての始原、すなわち神のうちのみ「無条件的にして端的な存在」(*esse absolute et simpliciter*) を有しているのである。この世界のうちのすべての原因においては結果は原因のうちに「これこれしかじかの存在」(*esse hoc vel hoc*) を有しているのであって、それらは「端的な意味における存在」としての神のうちのみ「無条件的にして端的な存在」を有しているのである⁽¹¹⁾。エックハルトによれば、神には最も内奥に存在するということが属するのであるが、世界に向かつての神の第一の働きは存在であり、存在はそれ自体としてはすべてのもののうちで最も内奥のものである⁽¹²⁾。あるいは最も内奥のものが世界との関係において現れるとき存在として現れるのである。存在はそれ自体として理念よりも知性よりもより内奥のものであり、すべての存在者にとって

より包括的で根源的なものである。

以上のようにしてエックハルトは『ヨハネ福音書註解』においては、「始原」をまず「理念」として、つぎに「知性」として、最後に「存在」として把握しているが、『創世記註解』においても⁽⁴³⁾その冒頭の聖句「始めに神は天と地とを造られた」(In principio creavit deus caelum et terram) (1,1) を解釈して、やはり同様に「始原」をその思索の深まりに応じて第一に「イデア的理念」(ratio idealis)として、第二に「知性的存在」(natura intellectus)として、第三に「永遠の第一の単一の今」(primum nunc simplex aeternitatis)として、第四に最終的に「存在」として把握している。このことからエックハルトは旧約と新約の異なる聖句をなしうるかぎり整合的に解釈し、それらのあいだに何の区別も認めていないことが判る。むしろエックハルトは聖書の全体が部分のうちに含まれており、一つの聖句のうちにも聖書全体の思想が反映していることを確信していたのである。したがって上の二つの聖句に依拠して得られた「始原」の思想はエックハルトによれば聖書全体の思想の反映である。以上から明らかのように、このような「始原」への問いは聖書の哲学としてのエックハルト思想を貫くものであると言えるだろう⁽⁴⁴⁾。

3

次に『ヨハネ福音書註解』において注目しなくてはならないことは、その特異な受肉論である。エックハルトは「言葉は肉となった。そしてわれわれのうちに住んだ」(verbum caro factum est et habitavit in nobis) (ヨハ 1,14) を解釈して、キリストのうちで、私とは異なったあの個体のうちで「肉になった言葉」は、もし私も神の子であるために、私のうちでもペルソナ的に肉にならなかつたならば、私にとつては僅かなことにすぎないと言う⁽⁴⁵⁾。通常の把握

では、言葉が肉となったのは、二千年前のナザレにおけるイエス・キリストのうちであってこれを「受肉」(incarnatio)の出来事と呼んでいる。しかしエックハルトによれば、受肉の第一の結実は、われわれが神の養子となることによって神の子になるということのうちに存する⁸⁰⁾。つまり、エックハルトは上の聖句の後半「われわれのうちに住んだ」という部分を重視する。すなわち、われわれが神の養子となることによって神の子として生まれるということになった言葉が「われわれのうちに住んだ」ということである。そしてそのように神の子として新たに生まれた人をエックハルトは「義人」(iustus)、「神的人間」(homo divinus)と呼んでいる。

またそれのみならずそのような義人は義と「同名同義的に」(univoce)義なるものであって、そうでなければそれぞれの義人は真の意味での義人ではありえないとさえ言う⁸¹⁾。しかしこのことは人間は受肉において神と同一の者になることを主張しているのではない。人間はその靈魂において「神の像」(imago dei)であって、神そのものになることは決してない。それらのあいだには、プラトンの意味における範型と似像の区別が厳然としてある⁸²⁾。したがってこのことは人が一度義人として新たに生まれるならば、以後は恒常的に義人に留まるということではない。義人は「義人であるかぎりにおいて」(inquantum iustus)義に等しいものであるが、義人はまた義人の存在なしに存在するのであり、したがって義人でない可能性も依然として残っているのである⁸³⁾。さらにまたこのことは人間が自力で達成できることでもない。「あなたがたは神の子らの有する(神の)養子にするという霊を受け取っている」(accipitis spiritum adoptionis filiorum) (ロマ8,15)⁸⁴⁾。われわれはただ神の「養子にする」(adoptio)という恩寵によってのみ神の子になるという可能性を有しているのである⁸⁵⁾。

このような事態をさらにエックハルトはニケア信経に即して「父から子が生まれる(generatio)。父と子から聖霊が霊発する(spiratio)⁸⁶⁾」という定式で繰り返し説いている。これはまず言うまでもなく父なる神から子なる神、キ

リストが生まれることとして捉えられる。しかしここでもエックハルトは第一次的に靈魂のうちに子が生まれることとしてこの事態を把握する。靈魂のうちに子が生まれることによって、われわれのうちでは「私」ではなく「神の子」が生きる。そのことによって人は神の子としてあることが可能になる。しかしそのことは再び自力によってではなく、聖霊によって可能になるのである。そして人が神の子としてあるときにのみ、神があるがままに認識することができる⁸³。人は人としては神を「鏡を通して謎のような仕方だ」(per speculum in enigmate) (1コリ13,12) 被造物を通して認識するにすぎない。しかも上に述べた事態は人が神の子として新たに生まれることによって生じるのであって、人は一度神の子になれば、つねに神の子としてあるということではない。エックハルトはそれをオリゲネス⁸⁴に依拠して「個々の徳の業」(singula virtutis opera) によって神の子になると言っている⁸⁵。ここでは上で受肉論的に捉えられていた事態が父―子―聖霊という関係性において三一論的に把握し直されているのである。

このようにしてその同一の事態は究極的には「靈魂のうちに於ける神(の子)の誕生」(partus dei in anima)⁸⁶と呼ばれるのであり、これこそが『ヨハネ福音書註解』の根本的モチーフであると言うことができるだろう。従来このモチーフはドイツ語説教の根本主題であるとされてきたが、『ヨハネ福音書註解』においてこそ思弁的に委曲をつくしてその事態が説かれているのである。以上のような「受肉」と「三一性」の把握のうちには、エックハルトの主體的実存的関心が強く現れていると言えよう。エックハルトはキリスト教の奥義である受肉と三一性に対してもトマスとは異なつてどこまでも自然的理性によってその実存的意味を探究したのである。

註

(1) 使用テキストは以下のとおりである。Meister Eckhart, Die deutschen und lateinischen Werke, herausgegeben im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Die lateinischen Werke Bd. III, *Expositio sancti Evangelii secundum Iohannem*, herausgegeben und

- übersetzt von Karl Christ, Bruno Decker, Josef Koch, Herbert Fischer, Loris Sturlese und Albert Zimmermann, Stuttgart 1994 (略号『*In loh.*』).
- (2) Cf. Meister Eckhart, *Prologus in opus tripartium*, n. 1-6.
- (3) Vgl. Meister Eckhart, Die lateinische Werke, Bd. III, S. XXI.
- (4) Loris Sturlese, Meister Eckhart in der Bibliotheca Amploniana. Neues zur Datierung des "Opus tripartium", in: *Miscellanea Medievaia*, Bd. 23, S. 442 f.
- (5) 筆者(な)の語を以下の箇所において見出した。Cf. *In loh.* n. 343.
- (6) Cf. *ibid.*, n. 2.
- (7) 『ヨハネ福音書註解』の始原論については、拙論「エックハルト『ヨハネ福音書註解』における始原論」、中世思想研究、第XXXIII号、pp. 129-146参照。
- (8) Cf. *In loh.* n. 6.
- (9) Cf. Augustinus, *De trinitate*, VI, c. 10, n. 11.
- (10) Cf. *In loh.* n. 20.
- (11) Vgl. Herbert Fischer, Die theologische Arbeitsweise Meister Eckharts, in: *Miscellanea Medievaia*, Bd. 7, S. 57. H. Fischerによれば¹⁴ esse simpliciter esse hoc et hocの区別はエックハルト思想の根本的教説であるが、それはアウグスティヌス、ボエティウス、ディオニシウスの伝統に遡及するものである。
- (12) Cf. *In loh.* n. 34.
- (13) 『創世記註解』の始原論については、拙論「エックハルト『創世記註解』における始原論」、中世哲学研究、第九号、pp. 52-59参照。
- (14) Vgl. Burkhard Mojsisch, *Meister Eckhart. Analogie, Unvollziehbar und Einheit*, Hamburg 1983, S. 141.
- (15) Cf. *In loh.* n. 117.
- (16) Cf. *ibid.*.
- (17) Cf. *ibid.*, n. 119.
- (18) Cf. Meister Eckhart, *Sermones*, n. 510.

- (19) Cf. *ibid.*, n. 455.
ヴァルガータ訳による。現行共同訳聖書では「あなたがたは神の子とする霊を受けたのです」訳されている。
- (20) Cf. *ibid.*, n. 121. エックハルトはこの同じ事態を「キリストは「出生」(generatio) によって神の子であるが、われわれは「再生」(regeneratio) によって神の子であるとも言っている。
- (21) Cf. *ibid.*, n. 469.
- (22) Cf. *ibid.*, n. 123.
- (23) Origenes, *In Ier. hom. 6* (Hieronymo interprete) (Migne, PL 25, 637).
- (24) Cf. *In Ioh. n. 341.*
- (25) 筆者はこの語を以下の箇所において見出した。Cf. Meister Eckhart, *Sermones*, n. 544.
「コッペル」(「自然的理性」(ratio naturalis))とは本性的に超越的なものに開かれた「理性」であると捉えられねばならない。
- (26)
- (27)